

小松学舎と古墳

森 浩 一

一、小松学舎は滋賀県滋賀郡志賀町にある。“シガ”が三つも重なるのだから、近江平野の中心にあるのだろうと錯覚しそうだが、小松学舎へ行くには、左手に比良連峰、右手に琵琶湖のせまる平地のとほしい景色が展開する湖西線を利用する。北小松で下車して、そのまま進行方向、つまり敦賀の方へ線路にそった国道を歩く。このあたりは山が湖畔までせまっているため、国道が狭く感じられ、猛スピードで走ってくる大型トラックに身を打ちませながら進まねばならない。

道が左よりのカーブにかかると、湖岸は急な崖になり、崖を削ってつくりだした道路には落石よけのコンクリートの天井がある。ここには狭いながらも歩道があるため、湖を眺めるゆとりをもって歩くことができる。この上はもう小松学舎の一部で古墳のある尾根状地形である。歩道がなくなると、左手、つまり山に入る道があって、坂道にかかって湖西線のガードをこすと、山麓の森をきりひらいた小松学舎の建物が見えだす。

二、日本人には、方程式的な思考法がいくつもある。例えば古代の豪族を含めて有力な政治集団は広大な農耕地、それも豊かな水田の

ひらけた土地に発生し、存続するという考えなどはその典型であろう。この考えは、とくに戦後の歴史研究者に根強く、生産力とは水田による米の収量だとおもってしまったこと、別の言い方をすると江戸時代の政治体制、つまり紀州五十五万石とか薩摩七十二万石という発想を古代に適応しすぎた。もちろん米の収量も重要だが、そのほかにも交易とか交通、あるいは漁業、鉄、馬などと軽視できないものがたくさんある。だから農業中心の史観によると、小松学舎のように山地形で、しかも付近にこれといった水田のない土地には豪族とよべるほどの集団が発生するはずはないし、したがって立派な古墳が築かれる土地でもないということになる。

三、大学紛争の少し前だったと記憶するが、何かの要件で総長室へ行ったとき、大きめの人形をいれるぐらいのケースに考古学という須恵器、つまり古墳時代の土器が三点いれてあった。それにはラベルがそえられていて、小松学舎出土という。その土器は、形の特徴から六世紀末から七世紀初めのもので、古墳へ埋納するために製作した須恵器であるのは確実だが、それまでに私が見なれている奈良



古墳の測量風景

や大阪の須恵器にくらべてたいへん小さい。まるでお雛様の食器である。遺物として珍しいものではないが、小型という点が注目された。だがかなり前に出土して現地の様子がわからないということもあって、北小松古墳群を訪れたのはさらに数年たってである。

四、小松学舎の建物の手前に山をきりくずした少しばかりの広場があり、そこから山に登る小径がある。クモの巣が張り、枯木がたおれており、ほとんど人は通っておらず、何回か来たことがあっても途中で径でない方へ迷いこんだりする。この下を湖西線のトンネル

が通っているのだが、古墳は東に面した斜面にはなく、北から南へつづく尾根筋の南西に面した斜面に点在している。いずれも北小松の集落と港を見下ろす位置に築かれていて、逆にいえば北小松の港から見上げられるところに古墳があり、古墳をのこした集団を考える手がかりになる。

北小松古墳群を構成する各古墳は、雑木林にかくれており、正確な形や大きさはわからなかったけれども、直径一五メートル、高さ二〜三メートルの盛土をした円墳と推定されている。墳丘の中央に塊石や大石で墓室を作っていて、崩壊個所からのぞいてみると、考古学でいう横穴式石室である。

五、日本の古墳時代は、前期・中期・後期の三時期に区分したり、前期と後期の二期に区分したりするが、要するに古墳時代に変化があったことを示している。現代のように刻々と新しい文化が生まれている時でも、こと人の死にでくわすと、長年の慣習で葬儀をおこなうものだが、わずか三百年あまりの日本の古墳時代に、二期にせよ、三期にせよ、区別して説明しなければならぬというほど内容が激変しているのだから、そのことの原因

の重要性を感じる。このようなところに、江上波夫氏の提唱する騎馬民族征服王朝説などが生まれる背景がある。

それはともかくとして、北小松古墳群は三期区分にしろ、二期区分にしろ、それぞれの後期に属する古墳で構成されている。円墳というだけなら、どの時期にもあるが、死者を葬っておく施設としての横穴式石室は、その萌芽的なものを別にするとはほとんどが後期のもので、別の表現をみると、古墳後期の一特色は横穴式石室の流行といつてよい。

横穴式石室は、棺を墓室におさめて密閉したあとは二度と開けない前々中期の縦穴式石室にたいして、墓室の一方に墳丘の外へ至る通路を設けている。したがって横穴式石室は死者を墓室におさめたあとも、通路の入口を開けて墓室へ入ることのできるように設計されていて、その意味では新式の墓制であるし、また東アジアで横穴式石室が発達するのが高句麗であり、ややおくられて百済であったことから朝鮮的墓制ということもできる。

六、以上が私の知っていた北小松古墳群のあらましで、正確にいくつの古墳があるのかとか、総長室にあった土器がどの古墳の出土品



ミニチュア須恵器の出土した8号墳調査風景

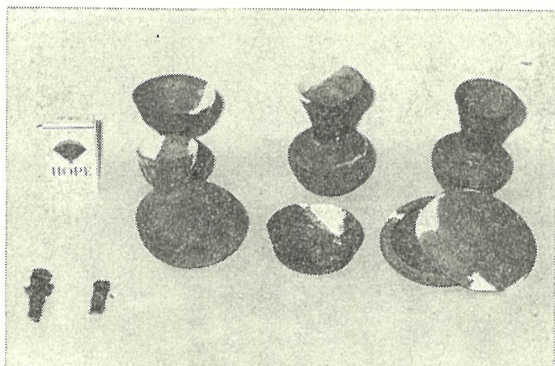
かなど未調査であった。小松学舎には、さし当って古墳の存在をあやうくするような工事計画は聞いてはいないし、発掘はできるだけ避けて遺跡を保存するのがぞましいので、再び数年がたった。だがいくつかの古墳は、すでに石室の一部が崩壊していて、それを防止する措置は必要であるし、さらにこのままでは古墳を見学する人に危険でもあった。

一九八〇年、文学部文化学科文化化学専攻の考古学実習室で日頃研究に集っている学生たちが、イブを利用して北小松古墳群の測量をしたいと相談してきた。このメンバーには、これより前に、数年がかりで園部盆地での遺跡の分布調査に参加した者もいた。しかし、忍耐力と体力がいり、その割には発掘のように遺物が出土することもない地味な調査に終わるかも知れないので、本当にやりぬげるのかと多少不安におもっていた。それに、交通費も宿泊費も参加者が各自負担するという。七、私が同志社大学へきたころ、全国的に発掘はまだ小規模で、それに参加する者が費用をもちよったりしていた。その方式で製鉄遺跡とか製塩遺跡とか未開拓の領域にいどんだりした。だがその後の高度経済成長とかで、飛行場や工場、団地や高速道路をつくるにさし当って遺跡を発掘することが激増し、そのため発掘が大規模になり、費用を持ちよるところか参加者に手当てが支払われるようになった。このことは考古学を変質させ、大学での発掘の実施をむつかしくした。このような情況のなか、学生たちは、考古学のあるべき姿を模索しようというのであった。

測量調査は三角点から「高さ(海拔)」を移動する作業からはじまった。例えば一番高所にある一号墳の頂きは海拔一六四・四メートルという具合である。当然のこととして測量によってその土地を詳しく観察できるのだから、新しい古墳を見つけたら、あるいは墳丘の裾にめぐる列石を見つけたらした。

調査は翌年の春休みとイブにも継続した。この時は墳丘の測量から口を開けている横穴式石室の測量へと進んでおり、小松学舎内で十一基の古墳の存在がわかった。私はすでに述べたように北小松古墳群は尾根上にだけあるものとおもいこんでいたが、学生たちは湖西線のトンネルの西入口近くでも六基の古墳の存在を確認した。そこは小松学舎の建物とは山の尾根をはさんだ反対側で、私などは校外だと信じていたような場所である。

八、「ミニチュアの須恵器が崩壊した石室に露出しています」という電話があった時、私はまだトンネル付近の状況を知らなかったため、様子のみこめなかつた。だが学生たちの報告では、湖西線のための資材置場の工事をした跡があつて、石室は落下寸前というので、一九八二年三月、八号墳の土器の露出個



8号墳出土の須恵器と鉄釘
 ——ホープの箱の大きさと比較すると
 かわいい土器であることがわかる——

所にかぎった発掘をおこなった。

この調査には、大学院生石川直章、四回生
 鋤柄俊夫、三回生坂靖、森下浩行らの諸君が
 推進力となり、目下報告書をまとめているが、
 尾根上の古墳がさし当って保存されているの
 にたいして、トンネル入口の古墳は、土取り
 工事によって損傷をうけ、石室の一番奥の部
 分だけが崖に露出しているという最悪の状況

で、総長室にあった須恵器はここ——九〇十
 号墳のいずれか——での出土と推定される。
 今回八号墳からは、ミニチュアの須恵器や鉄
 釘が出土したが、それは病人でいえばあくま
 で応急手当てであって、古墳の保存措置を考
 えながらの本格的な調査は、何分地形が崖に
 改変されてしまっているので、抜本的な対策
 をたててからになる。

このように学生たちが私の重い腰をあげさ
 せ、おそまきながら予想もなかった湖西線
 建設による校地内の古墳への影響に気付いた
 のだが、一般の人たちがこの古墳群を訪れる
 にはまず保存対策と整備が急務であり、それ
 が実現すると古墳群のある学舎として異彩を
 放つであろう。

(大学文学部教授)

